

第2章 子育て支援に取り組む地域活動推進シンポジウム in 三重

1. シンポジウムの概要

テーマ：地域ぐるみで子育て支援

日時：平成 17 年 12 月 11 日（日）

場所：鈴鹿男女共同参画センター「ジェフリーすずか」

参加人数：80 名

開催目的：地域における子育て支援活動の重要性について理解を深めるとともに、地域ぐるみで取り組んでいる支援活動について学ぶ。

タイムスケジュール：

10：00～10：30 受付

10：30～10：40 開会行事

10：40～12：00 基調講演

テーマ「地域における子育て支援活動の重要性について」

講師 谷岡 経津子（四日市大学総合政策学部教授）

12：00～13：00 休憩・昼食

13：00～14：00 事例発表

横浜市神奈川区「すくすくかめっ子」

報告者：斎藤 ひとみ（横浜市神奈川区役所福祉保健センター）

塚原 泉（「すくすくかめっ子・親がめ会議」メンバー）

名古屋市天白区「天白子ネット」

報告者：奥田 睦子（名古屋市天白区「天白子ネット」代表）

14：00～15：00 パネルディスカッション

テーマ：「地域ぐるみで子育て支援」

パネラー

塚原 泉（「すくすくかめっ子・親がめ会議」メンバー）

斎藤 ひとみ（横浜市神奈川区役所福祉保健センター）

奥田 睦子（名古屋市天白区「天白子ネット」代表）

小林 卓（鈴鹿市保健福祉部子育て支援課長）

コーディネーター

谷岡 経津子（四日市大学総合政策学部教授）

15：00 閉会

2. 基調講演の主な内容

これまで「学校教育」がすべてと考えられていたが、実際、学校教育が占める割合は少ない。それ以外は「社会教育」と言われてきた。そして、すべてを合わせたものを「生涯学習」、「生涯教育」と言う。学習は双方向である。今からは民がボランティアをする。それが協働、コラボレーションである。



伊勢神宮の「おかげ参り」には日本全国から人が集まった。街道は人と人との交流起点である。街道はボランティアを運んでくる。家で作ったお菓子を提供したりする。そういう意味では三重県はボランティアの発祥の地と言える。また、阪神淡路大震災が起きた年は、ボランティア元年でもあった。今では、高齢者、子育て、災害救済などのボランティアも盛んである。

生涯学習のボランティア活動は現代的な課題に向かうものである。温故知新というように、新しい時代のニーズもある。高齢者の方の再教育も大事である。教育は「正しいことを教えて育てる」だが、「協力の協に育てる」という言い換えも考えられる。家庭、地域、学校の3つの力がプラス、かけ算になるとよい。最近では「今日行く」という言い換えもある。

次に、子育て支援の重要性についてだが、家庭の教育力が低下している現在では、安心して預けられる施設がもっと増えるとよい。新しい人と連携し、情報を交換し、さらに指導者が必要である。社会全体で子どもを育てていくという機運をつくる必要がある。ぜひ警察のOB、福祉のOBに活躍してほしい。高齢者であっても新しい知識を身につけてほしい。長寿社会における賢い生き方を学ぼう。

子育て支援はまさに街づくり。子どもから学ぶことはいっぱいある。教科書、インターネットからは学べないことがある。子どもの居場所づくりでは、最近では居場所の質、レベルも求められるようになってきている。三重県にも子育てに関する居場所づくりの芽が出てきている。学校の空き部屋などを利用して、いろんなところが育ちつつある。

また、現代を取り巻く幼児や親も変化している。母親は自分が楽しいところに行きたがる。子どもにはもっと自然体験をさせる必要がある。絵の具のにおいをかいただけで、倒れる子どもいる。子育てがピンチの時こそ、父親がもっと前面に出てきてほしい。

地域学は人づくりである。みなさんは人づくりを担っている。自分だけのやる気だけで広がらない。リーダーになる人は黒子に徹することも大事である。また、女性は発想が得意だが、目標とか評価が苦手であるので、男女融合も必要なことである。

ボランティアに必要な「あ・い・う・え・お」の精神がある。「あ」は「遊び心」、「い」は「粋な生き方」、「う」は「浮き沈みがある 継続は力なり」、「え」は「笑顔を忘れずに」、「お」は「思いやりをもって」である。また、ボランティア組織、運営のための「か・き・く・け・こ」もある。「か」は「簡単なことから始める」、「き」は「気楽な気持ちで」、「く」は「来るものは拒まない」、「け」は「けじめをつけて」、「こ」は「こだわりをもって」である。最後に、ここが特色なのよ、私たちの特徴よというものを出すこと、例えば、悩みごと相談がとっても上手、キャンプが上手など、各グループのこだわりを持つことも大事である。

3. 事例報告の主な内容

横浜市神奈川区子育て支援事業「すくすくかめっ子」

まず、神奈川区役所福祉保健センターの保健師である齋藤ひとみさんと「すくすくかめっ子・親がめ」のメンバーである塚原泉さんから「すくすくかめっ子」の報告がなされた。「すくすくかめっ子」は、横浜市神奈川区に



において、2000年から取り組まれている、世代を超えて、地域みんなが見守り、子どもを育てていくまちづくり事業である。「子どもに関する団体が集まり、子育て支援のあり方について検討し、子育てに対して、みんなの関心が高まるように働きかける」親がめ会議、「区内の

各種団体の代表者が集まり、「親がめ会議をサポートする」子育て支援委員会、「まちごとに世代をこえて交流できる親子のたまり場を開く」すくすく子がめ隊、の三位一体で事業を展開している。神奈川区は、横浜駅に隣接している区で、海側の工業地帯には、京浜急行、東急東横線などの様々な電車の路線が走っているが、山側の農業地帯では、バス1本または電車1本では、役所までこられない地域もある。そのため、「すくすく子がめ隊」という名称で、区内29ヵ所において町内会や子育てサークルなどの有志が乳幼児とその親子の身近なたまり場づくりを行っている。この「子がめ隊」は、場づくり、仲間づくり、情報づくりの3本柱を大事にしている。

「子どもが育つまち天白 天白子ネット」

次に、「子どもが育つまち天白子ネット」について、代表の奥田睦子さんから報告がなされた。人口約15万人の名古屋市天白区は、通勤族が多く、平均年齢39歳と若い地域である。「天白子ネット」は2001年4月に、天白区内の子育てに関わる活動を行っている個人、サークルや幼児教室などの団体が、行政機関とも結びつきを深め、子育てしやすいまちづくりを目標に、各団体同士、そして行政と市民をつなぐ役割（ネットワーク）を目指して発足した市民グループである。目的は「つなぐ」ことである。主な活動として、情報発信事業として、月刊で子育て情報通信紙「PAKUっ子」の発行、年刊で冊子「天白区 子どもに関するグループ紹介」の発行、交流事業として子育てサロン「にこにこ広場」の開催、「天白おやこ子育て広場」の開催、ネットワーク事業などを行っている。

鈴鹿市の子育て支援状況

最後に、鈴鹿市の子育て支援状況について、鈴鹿市保健福祉部子育て支援課の小林卓課長よりお話しがあった。市内には公立が10ヵ所、私立が28ヵ所の保育園がある中、行政として子育て支援センターをオープンした。連日大盛況で1日100組以上の参加があり、とうてい1ヵ所では、足りない状況であるという。今行政としてやっていけないといけないことは、「すくすくかめっ子」や「天白子ネット」のように、地域で子育てしていくために、地域の方々の協力を得ることであると語られた。

4. パネルディスカッションの主な内容

パネルディスカッションでは、参加者全員に紙を配布し、感想や質問を受け付ける形式を取った。質問には、パネラーが順次一問一答で答えながら、議論を深めていった。保険や予算、地域と行政の連携や担い手のことなど、具体的な質問が多く出され、鈴鹿での活動にもつながるような話となった。以下、その一部を紹介する。

まず質問のひとつは、「子育て支援というと、女性の人に任せきりだと思いますが、溜まり場に集まる男性がいますか。年齢的にはどうですか」というものがあつた。これについては、「すくすくかめっ子・親がめ会議」の塚原さんが次のように回答している。町内会の男性の方は、お祭りやクリスマス会等のときに来る。また、町内会でサロンの開催を承認してもらうために、何回か見に来ていただき、現場を知ってもらうようにしている。最初は嫌でも、出てみると、「いいじゃない」と思ってもらえるようになる。また、男性の出番をつくることで、より参加してもらえる。

また、「閉じこもりがちの方をどのように誘えばいいのか。医療機関の関わり方はどこまででしょうか」という質問には、「天白子ネット」の奥田さんと神奈川区福祉保健センターの



斎藤さんが答えてくださった。奥田さんは、天白区では、主任児童委員が戸別訪問する際に、「PAKUっ子」を配ってもらい、子どもが生まれたばかりの時期に、天白区の子育て情報を目にとめてもらえるようにしていると話された。また、主任児童委員さんの訪問や「にここ広場」では、問題を抱えている家庭を把握した際に、保健師や相談機関などの専門機関につなげるようにしているという。

斎藤さんは、閉じこもりがちな親へのアプローチについて、お話しされた。自分の担当地区で、閉じこもりがちな方がいたとき、その人とお話しをして、出てきそうな雰囲気になってきたときに、その人と無理矢理、約束を取りつけている。保健師に声をかけられると、みなさん、気が弱いので、待っていると、だいたい6、7割の人が「子がめ隊」が行っている親子のたまり場に来てくださると話された。また、このときに、来られなかった人も、関係を切らずに、アプローチを変えて、どうしたら外に出られるようになるかを探るようにしている。例えば、比較的若いお母さんは、彼女たち独自のネットワークを持っているので、そうしたお母さん達の力を借り、公園などで声をかけてもらうようするなどの方法がある。どのようなアプローチが良いかはケースバイケースのため、その人が外に出てきやすいポイントを分析して、やっていくことが大事だと思うと語られていた。

当日の参加者に、保育士の方が多かったためか、「今、保育所に求めることはどんなことですか」という質問がでた。このことについては、小林課長が、地域と連携して、運営していくことであると話され、地域の人々が保育所を利用して、何かをして頂けるようにしていくことも大切であると語られた。

5. シンポジウムの感想

参加者のアンケートでは、「今後、鈴鹿市でどう子育て支援を進めていくことができるか?」という将来を前向きに見据えた感想が多く見られた。

基調講演に関しては、「生涯学習」という大きな視点の中で「ボランティア」の重要性について語っていただいたため、「今後のライフプランの中にボランティアを取り入れていきたい」と感じの方が多くいらしかった。また、先生はボランティア実践者でもあったため、「ボランティア活動についてのノウハウを分かりやすく説明してくださった」、「難しい言葉はなく、わかりやすく、ユーモアも少し交えた口調で聞きやすかった」と好評であった。

事例報告やパネルディスカッションについては、「親の集まる場所を増やしていくことが大切ということが確認できた」、「天白のようにわくわくカレンダーがあるとよいと思った」など、各地域での実践活動に刺激を受けた感想が目立った。中には、「行政、団体両側のパネラーであったことで、一方的な意見に終わらず良かった」、「行政を巻き込んだ計画の必要性を感じた」など行政と地域との連携の大切さを実感した参加者も複数いた。

鈴鹿市でのシンポジウム企画では、鈴鹿市の地域での子育て支援の取り組み状況を踏まえ、地域での子育て支援の取り組みがさらに活性化するには、次に何をしたらよいのかということを考え、事例の選定と依頼を行った。そのねらいがシンポジウムの参加者に伝わったことに関して、企画段階からご協力いただいた鈴鹿市の小林課長、事例報告を引き受けてくださった塚原さん、斎藤さん、奥田さん、参加者がより議論に加われるようにコーディネートをしてくださった谷岡先生には、心より感謝申し上げます。また、シンポジウムの開催にあたっては、伊藤会長をはじめ、生活学校の皆さまのご協力を頂き、御礼申し上げます。

(末富真弓)